

# 「(し) そうだ」の成立条件<sup>1</sup>

Kekidze Tatiana

キーワード そうだ、成立条件、認知言語学、客観主義、ソシュールの言語観

## 1. はじめに

本稿は、「雨が降りそうだ」や「このりんごはおいしそうだ」などのように用いられる「そうだ」の意味記述を目的としている。まず、ケキゼ（2000）の仮説を検討し問題点を解決した上で、新たな仮説を提起する。次に、その仮説の上に立ち、「そうだ」に関する先行研究を体系的に検討し、それらの研究と本稿の仮説の違いが人間の言語をどう見るかという根本的な立場の違いによるものであることを示す。

## 2. 先行研究とその問題点

### 2. 1 寺村（1984）など

森田（1980）、寺村（1984）、中畠（1991）、菊地（2000 a）などに代表される「そうだ」に関する先行研究のほとんどは、目の前の事態を、すでにあるとらえ方ではとらえられなかったものとして扱っている。その結果、実際の使用場面を考えたときに、「そうだ」という形式を選ぶ背景にどのような概念操作があるかを明らかにできない。これらの研究方法については、「そうだ」に関する本稿の仮説を踏まえた上で3. 6. 1で改めて取り上げる。

### 2. 2 木下（2001）

上で見た寺村などとは対照的に、木下（2001）は、背後にある概念操作をも「そうだ」の分析に含めている。その上で、「そうだ」に前節する語の表わす事態と話者が知覚した事態との間に「隣接関係」が成り立っているという仮説を提起し、「そうだ」の意味を次のように記述している（p.153）。

- ① 述べられている内容（命題）と隣接する事態が、存在・生起していることを表わす。

② 今、存在・生起している事態から、隣接する命題が導かれたことを表わす。

①は「様態」(＝「現状説明」)を表わす側面を、②は「判断の結果がどのようなものかについて述べることに主眼をおく」(＝「予測」)という側面を重視した場合である、というのが木下の説明である。

それでは、この意味記述の問題点について見てみよう。まず、「様態」を表わす側面を重視した①では、「述べられている内容」は限定されていない。その結果、話者にとって「確認済み」の事態もその中に含まれてしまう。つまり、例えば、ある料理を食べてみてからでも「(あるモノの外観)」と「(そのモノの)内面」の隣接関係に関する「知識」に基づいて「この料理、とてもおいしそうだ」と言うことができるということになってしまう。しかし、実際にはこの場合は「そうだ」は用いられない。<sup>2</sup>したがって、①は、「そうだ」の意味記述としては妥当ではない。

次に②の記述を検討してみよう。「隣接する命題が導かれた」という記述では、空が曇っているのを見て「今日は雨が降るよ。傘を持っていきなさい」と断定している事態も含まれてしまう。しかし、「そうだ」はこのような断定的な判断を表わす形式ではない。したがって、②も「そうだ」の意味記述としては妥当でない。木下のこの仮説についても、3. 6. 2でもう一度取り上げ検討する。

## 2. 3 ケキゼ (2000) による分析

ケキゼ (2000) では、木下 (2001) と同様に、「そうだ」の背後にある概念操作に注目している。しかし、分析そのものは木下とは違う。まず、ケキゼ (2000) は「そうだ」の意味を「成立条件」として考えている。この点に関しては本稿の立場は変わっていない。しかし、その「成立条件」とは具体的にどのようなものであるか、という点に関してはケキゼ (2000) の記述は不十分である。例えば、「この料理はおいしそうだ」の場合の判断をケキゼ (2000) は次のように説明している。

① 話者は「この料理」の外観を「おいしい料理が付随的に持っている特徴の集合に属している特徴と同じである」と認め、

② 「この料理」は「おいしい料理である条件がそろっている」と判断する。②で提案されている「そうだ」を含む表現全体の意味については、本稿も同意見である。しかし、「この料理」の外観が「おいしい料理」の外観と「同じである」という①からは、「この料理はおいしいかもしれない」というように、「そうだ」だけでなく、他の形式の表わす判断も導かれる。したがって、ケキゼ

(2000) では、①から②へと移る論理に飛躍があり、それを埋めるためにさらなる精密化が必要である。

### 3. 本稿の分析

#### 3. 1 用法1：[プロセス]における「事態Bの成立条件」

##### 3. 1. 1 仮説Iの提示

ここでは、時間的に連続して生じる二つの事態の関係が問題になるいわゆる「直前」の「そうだ」について考察を行う。

本稿では、ケキゼ(2000)と同様に、「事態の成立条件がそなわった状態」、「事態発生中」、「事態成立」という三つの構成要素からなるものを[プロセス]<sup>3</sup>として考えることにする。ここで言う[プロセス]は、ひとつの対象に起こる連続的な変化であり、複合的なひとまとまりの事象(「複合体」)である。その上で「そうだ」が用いられる範囲を考えると、「成立条件がそなわった状態」ということになる。具体例で考えてみよう。

1. (ボールが机の端に向かって転がっていくのを見て) あ、落ちそう！  
「落ちる」と結び付く[プロセス]は次のように三つに分けられる。まず、「ボールが机の端に向かって転がっていく」段階が「落ちる成立条件がそなわった状態」である。この段階ではボールが止まって落ちない可能性がまだある。次は、ボールが机の端を越えてはいるものの、床にまだついていない状態である。これは狭い意味で言う「事態発生中」の段階である。最後に、「ボールが床についた」という状態は「事態成立」に当たる。言うまでもなく、この分け方は便宜上のものであり、三つの段階は一つの連続した事象を形成している。

本稿では、便宜上、知覚された事態をAと呼び、「そうだ」に前接する表現が表わす事態をBと呼ぶことにする。用法1では、Aは[プロセス]の「事態の成立条件がそなわった状態」の部分に当たり、Bは「事態発生中」の部分に当たる。以上から、用法1の「そうだ」の意味についての本稿の仮説は次のようになる。

##### 仮説I

①用法1の「そうだ」は、事態Aが[プロセス]の最初の段階に当たるものとしてとらえられた結果を表わす。(つまり、事態Aは単独の事象としてとらえられたものではなく、あくまでも事態Bの成立に至る過程の一部としてとらえられたものである。)

- ②「そうだ」が表わすのは、次のような判断（とらえ方）である。事態Aが成立しているからといって、必ずしも事態Bが成立するとは限らない。ただし、事態Bが成立した場合は、その前に必ず事態Aが成立している。
- ③以上の①と②から、「そうだ」は「[複合体]（[プロセス]）において事態Bの成立条件（の一つ）がそなわっている」ことを意味する。<sup>4</sup>

以上のことを図で表わすと、以下のようになる。

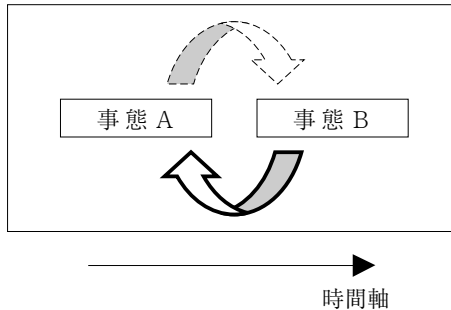


図1 「複合体」〔プロセス〕

図の大きな四角は「複合体」である。「事態A」から「事態B」への点線の矢印は「事態Aが成立しているからといって、必ずしも事態Bが成立するとは限らない」ということを表わし、「事態B」から「事態A」への太い線の矢印は「事態Bが成立した場合は、その前に必ず事態Aが成立している」ことを表わす。それでは、この仮説を具体例にそって見てみよう。

## 2. （傾いている家を見て）あの家、倒れそうだね。

例文2. で話者は「家が傾いている」という事態Aを、「家が倒れる」という〔プロセス〕を構成する家の倒壊そのものである事態Bの「成立条件がそなわっている状態」という要素に当たるものとしてとらえている。「家が倒れる」という事態Bに先行する段階として事態Aが生じていることは、続いて「家が倒れる」という事態Bが成立する潜在的可能性を示す。また、事態Aが成立しているからと言って、必ずしも事態Bが成立するとは限らない。つまり、問題の「家」は見かけによらず丈夫である可能性もあるし、「倒れる」前に修理される可能性もある。しかし、「家が倒れる」という事態Bが成立した場合は、その前に必ず「家が傾いている」という事態Aも（一瞬だけかもしれないが）成立し

ている。これが「家が倒れる成立条件（の一つ）がそなわっている」状態である。また、ここで注意しておきたいのは、文で述べられているのはあくまでも以上のようなとらえ方であり、事態Bが実際に成立するかどうかは問題とされていない。以上のことを図でまとめると、以下のようになる。

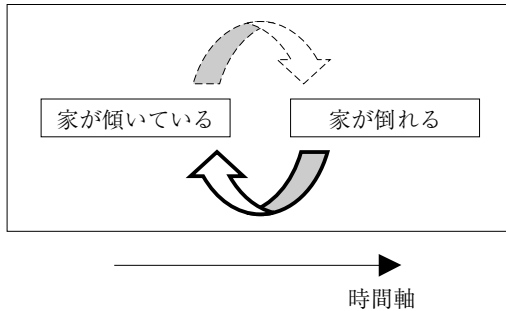


図2 「家が倒れる」と結び付く〔複合体〕

次に、仮説の①と②について順番に検証していこう。

### 3. 1. 2 仮説Ⅰの①の検証

まず、仮説Ⅰの①に従えば、「そうだ」が生起するためには、知覚された事態Aが、[プロセス]の最初の段階（＝[プロセス]の一部）としてとらえられる必要が生じる。以下、この条件を満たさないケースを見てみよう。

3. (レストランで食事をしている最中のお客さんを見て)×お客さんは帰りそうだ。

例文3. では、知覚された「食事をしている最中」という事態Aは「帰る」と結び付く[プロセス]の「開始前」の構成要素としてとらえられない。したがって、このような状況では「そうだ」が表わすような判断は成り立たない。また、以下のケースでも「そうだ」は用いられない。

4. (事故現場を思わせる様子を見て、過去の出来事について)×事故が起きそうだ。

この例文が示すように、「そうだ」は時間的な順序を逆行しては用いられない。その理由は、今現在見ている事態Aを過去に生じた[プロセス]の「開始前」の段階としてとらえることはできないからである。

### 3. 1. 3 仮説Ⅰの②の検証

仮説Ⅰの②によると、「そうだ」の表わすのは次のような判断（とらえ方）である。事態Aが成立しているからといって、必ずしも事態Bが成立するとは限らない。ただし、事態Bが成立する場合はその前に必ず事態Aが成立している。この仮説を、「そうになった」の例で検討してみよう。

#### 5. おぼれそうになった。

例文5. は、「おぼれる」という事態Bが成立しなかったことを表わす。一方、以下の例文が示すように、「おぼれる」という事態Bが成立した場合には、「おぼれそうになった」という表現は用いられない。

#### 6. ×おぼれそうになっておぼれた。

「おぼれそうになった」という事態は「おぼれる」の中ですでに含意されており、「おぼれそうになった」という事柄をわざわざ文の中に言語化するの是不自然である。この例文は、「そうだ」が「事態Bの成立条件」を表わす形式であることを示している。

## 3. 2 用法2：[モノ]における「事態Bの成立条件」

### 3. 2. 1 仮説Ⅱの提示

用法1では、AとBは、連続して生じる事態であった。ここでは、AとBが同時に存在している事態である場合について考察を行う。以下、この用法を用法2と呼ぶことにする。

人の「やさしさ」を経験するとき、その人の「やさしい」性格と顔の特徴などは同時に経験される。同種の経験が反復された結果、顔の特徴を含む「やさしい人」についての複合的な知識が形成される。この「やさしい人」という内部構造を持った複合的な[モノ]（＝[複合体]）の知識に基づいて、次に同様な顔の特徴を経験したときに、同様な性格であるという事態が成立していると推論される。以上のことから用法2の「そうだ」の意味についての本稿の仮説は次のようになる。

#### 仮説Ⅱ

- ①「そうだ」を含む表現において、(対象が)「ある表面的特徴を持つこと」(事態A)の知覚経験は、事態Aと事態Bをともに含む[複合体]の第一の構成要素としてとらえられている。(つまり、ここでも「ある表面的特徴を持つこと」(事態A)を単独の事態として見るとらえ方ではなく、[複合体]を通して「ある内的特徴を持つこと」(事態B)と関連付けるとらえ方である。[複合体]を導く繰り返された経験においては「A」と

「B」に前後関係は必ずしも明確ではない。しかしながら、「そうだ」の表わす判断を導く時点では「A」は確認済みであるのに対して、「B」は未確認である。そこで話者は、[複合体]において、「A」の経験を、「B」の経験に先行するものとして位置付けている。）

- ②「そうだ」の表わすのは次のような判断（とらえ方）である。（対象が「ある表面的特徴を持つこと」(事態A)は「ある内的特徴を持つこと」(事態B)を絶対的に成立させるようなものではない。ただし、「ある内的特徴を持つこと」(事態B)が経験された場合は、「ある表面的特徴を持つこと」(事態A)も必ず経験される。
- ③上の①と②から、「そうだ」は「[複合体]（[モノ]）において（対象が）内的特徴を持つこと（事態B）の成立条件（の一つ）がそなわっている」ことを意味する。

用法2の仮説は図に表わせば3. 1. 1. の図1と同じになるのでここでは省略する。以下、用法2の仮説について例文にそって見てみよう。

#### 7. （ある人の顔を見て）やさしそうな人。

この場合、「ある種の顔を持つこと」という知覚経験は、「やさしいという内的特徴を持っている人」という[複合体]の第一の構成要素としてとらえられている。これは「ある種の顔を持つこと」を単独の事態として見るとらえ方ではなく、「やさしい人」という[複合体]を通じて「やさしい性格を持つこと」と関連付けるとらえ方である。そこで「やさしい人」という[複合体]において、発話時点において確認済みである「ある種の顔を持つこと」は「やさしい性格を持つこと」に先行するものとして話者によって位置付けられている。そこから、話者が「ある種の顔を持つこと」を対象が「やさしい性格を持つことの成立条件」としてとらえる。言うまでもなく、これはあくまでも以上のようなとらえ方であり、ある人が実際に「やさしい性格」という内的特徴を持っているかどうかは問題とされていない。また、この仮説で記述されているのは、「そうだ」を発する際の話者のとらえ方であって、問題の「特徴」の「客観的」なあり方ではない（3. 2. 4参照）。

「B+そうだ」のBが感情・感覚を表わす語である場合も例文7. と同様に説明できる。

#### 8. （ニコニコしている人を見て）うれしそうだね。

ここでも「ニコニコしている」人は、一般的には「うれしい」という感情を持っているということが繰り返し経験され、高次の知識を形成する。このような知識に基づいて例文8. の話者は、問題の人物について「うれしいという感情を

持っている成立条件（の一つ）がそなわっている」という判断を下す。

### 3. 2. 2 仮説Ⅱの①の検証

用法2の定義上、「そうだ」が生起するには、[複合体]の構成要素のうち、知覚された特徴が「表面的特徴」としてとらえられ、「B＋そうだ」のBは「内的特徴」としてとらえられる必要がある。したがって、対象の「表面的特徴」としてとらえられた事態は「B＋そうだ」のBとしては用いられない。以下は、それを示す例である。

9. (ある人の洋服を見て) ×赤そうな洋服。

「赤い」などの「色」は、直接的に知覚可能なものであるから、対象の「表面的特徴」としてとらえられ、「内的特徴」としては普通はとらえられない。<sup>5</sup>したがって、この「赤い」は「B＋そうだ」のBとしては用いられない。

以上で挙げた「×赤そうな洋服」の例は、「表面的特徴」としてとらえられる事態が「B＋そうだ」のBとして生起できないことを示すものであった。今度は逆に、「内的特徴」としてとらえられる事態が「そうだ」の表わす判断の事態Aとしては用いられないことを確認する。

10. (ある料理を食べてから) ×この料理、いいにおいていそうだね。  
話者が嗅覚障害を持っているなどの特殊な条件がない限り、この例文は成り立たない。なぜならば、ある料理を食べた場合、その「におい」はすでに確認済みであるからである。「そうだ」はまだ生起していない事態の成立条件がそなわっていることを表わすので、確認済みの内的特徴Bについては用いられない。以下はそれを示す例である。

11. (お菓子を食べてから) ×甘そうだ。

### 3. 2. 3 仮説Ⅱの②の検証

仮説Ⅱの②によれば、「そうだ」の表わす判断を導く際には、話者のとらえ方は次の通りである。(ある対象が)「ある表面的特徴を持つこと」(事態A)が経験されたからといって、必ずしも「ある内的特徴を持つこと」(事態B)が経験されるとは限らない。しかし、「ある内的特徴を持つこと」(事態B)が経験されるときには、必ず「ある表面的特徴を持つこと」(事態A)も同時に経験されているというとらえ方である。まず、以下の例文を見てみよう。

12. あの人はやさしそうに見えるかもしれないけど、本当はこわい人だよ。

この例文では、ある人が「こわい」人であるとわかっているにもかかわらず、話者は「やさしそうだ」という表現を用いている。「内的特徴」と「表面的特



徴」が矛盾しているこのような状況でも「そうだ」が用いられることから、「やさしそうに見える」という「表面的特徴を持つこと」(事態A)が経験されているからといって、必ずしも「やさしい」性格という「内的特徴を持つこと」(事態B)が経験されるとは限らないというとらえ方が「そうだ」の表わす判断に最初から含まれていると言えるであろう。一方、この逆の場合、つまり、ある人が「やさしい」性格を持っているとわかっている場合には、「やさしそうだ」という判断は成り立たない。以下の例文がそれを示す。

13. (実際にやさしいと思っている先生について)×とてもやさしそうな先生だよ！

このように、問題の人物が「やさしい」という「内的特徴」を持っていると話者がわかっている場合には、「やさしそうだ」という判断はもう成り立たない。この事実から、少なくとも「そうだ」を発する際には、「やさしい」性格を持っている人なら、「やさしそうな顔」という特徴も当然持っているというとらえ方を話者がしていると言えるであろう。話者がこのようなとらえ方をしている以上、例文13. のように「やさしい」とわかっている人については「やさしそうだ」という表現をもう用いることができない。逆に言えば、このようなとらえ方があるからこそ、「やさしそうだ」という表現を使える場合は、問題の人物の「やさしい」性格が話者にとって未確認であるというように解釈されるのであろう。繰り返しになるが、ここで記述されているのは、問題の「特徴」の「客観的」なあり方ではなく、以上に挙げたような「そうだ」の使用の例から導かれた(「そうだ」を発する際の)話者のとらえ方である。

### 3. 2. 4 用法1と用法2の関係

本稿では、用法1(「倒れそうだ」など)の方が、用法2(「やさしそうだ」など)よりも基本的であると考え。なぜならば、用法1の[プロセス]における事態Aと事態Bとの関係は、用法2の[モノ]における「ある表面的特徴を持つこと」(事態A)と「ある内的特徴を持つこと」(事態B)との関係よりも観察しやすいからである。用法1のケースでは、[プロセス]における事態Aと事態Bの相互関係に人が気付かないことはあり得ない。例えば、「家が傾いてから倒れる」という経験や「空が曇ってきてから雨が降り出す」という経験は、ほとんどの人が共有していると思われる。また、用法1の「そうだ」が表わすとらえ方は、「そうだ」を使用するか否かと関係なく、話者の間で共有されている(その結果、客観的な事態としてとらえられる可能性が高い)。つまり、「そうだ」の表わす判断とは無関係に、家が倒れた場合は、当然その前に家が傾いているという事態が成立している。

それに対して、用法2の「そうだ」が表わす因果関係は客観的に存在しているわけではない。これは「そうだ」を使用する話者のとらえ方にすぎない。例えば、「やさしい人はやさしい顔をしている」という判断が常にすべての話者に共有されているわけではない。

そこで本稿は、より観察しやすい（より一般性の高い）とらえ方を表わす用法1（「倒れそうだ」など）を基本的な用法とみなす。用法1から用法2への拡張<sup>6</sup>に伴う一般化として「何らかの[複合体]において事態Bの成立条件（の一つ）がそなわっている」というスキーマ<sup>7</sup>が抽出される。このスキーマでは、[プロセス]と[モノ]という[複合体]の違いは捨象されている。

### 3. 3 用法3：[出来事]における「事態Bの成立条件」

用法1のAとBは、一つの対象の（連続して生じる）二つの状態であり、用法2のAとBは、一つの対象の表面と内面である。いずれにしる対象は一つである。しかし、「そうだ」は、そのような一つの対象だけにかかわる[複合体]の枠を越えた状況についても用いられるように拡張している。以下の例文を見よう。

14. (天気がいいから)洗濯物がすぐにかわきそうだ。

「天気がいい」という事態Aと「洗濯物がかわく」という事態Bは、一つの対象に起きる変化ではない。したがって、このAとBは、本稿で言うような一つの[プロセス]の構成要素ではない。しかし、ここでも、用法1と同様に、事態Aと事態Bを含むような繰り返しの経験された[複合体]（この場合は複合的な[出来事]）についてのより高次の知識が想定できる。その[複合体]において、「天気がいい」という事態Aが「洗濯物がすぐにかわく」という事態Bの「成立条件」（の一つ）としてとらえられていると考えられる。

すでに述べた通り、ある事態が別の事態の成立条件として話者によってとらえられたときに「そうだ」は使われる。以下は該当しないケースである。

15. (あるお菓子がよく売れていることを聞いて)×ふうむ、おいしそう！  
「(お菓子が)売れている」ことは「(お菓子が)おいしい」ことを成立させ得ない。したがって、この場合は「そうだ」の表わす判断は不自然である。一方、以下の場合なら、「そうだ」は自然に生起する。

16. (あるお菓子を食べてみて)ふうむ、これなら、売れそうだ。  
食べることで経験された「(お菓子が)おいしい」という事態Aが「(お菓子が)売れる」という事態Bの「成立条件」としてとらえることが可能であるから、この場合は「そうだ」は問題なく用いられる。

用法1（「倒れそうだ」）と用法2（「やさしそうだ」）では、判断にかかわる

〔複合体〕は一つの対象に起きる変化、または一つの対象の表面・内面だった。それに対して、用法3（「売れそうだ」）の判断にかかわる〔複合体〕はそのような〔複合体〕の枠を越えたより複合的な〔出来事〕というより高次の〔複合体〕を背景としている。ここで「高次」とは、複合性の度合いが高いことを意味する。〔出来事〕の方が〔プロセス〕と〔モノ〕よりもより高次であることを表わすために、以下、〔プロセス〕と〔モノ〕を「低次の〔複合体〕」と呼び、〔出来事〕を「高次の〔複合体〕」と呼ぶことにする。しかし、用法3の判断そのものは用法1・用法2とほぼ平行している。そこで、〔複合体〕に関する違いを捨象し、用法1・用法2のスキーマから用法3への拡張に伴う一般化として「（低次のまたは高次の）〔複合体〕において事態Bの成立条件（の一つ）がそなわっている」というスキーマが抽出される。

### 3. 4 「そうだ」の用法のまとめ

ここでは、「そうだ」の用法をまとめてみる。3. 2. 4では、用法1と用法2の共通点を表わすものとして「何らかの〔複合体〕において事態Bの成立条件（の一つ）がそなわっている」というスキーマを抽出したが、3. 3において用法3から区別するために、用法1・用法2の〔複合体〕をあらためて「低次の〔複合体〕」としてとらえ直した。つまり、用法1と用法2のスキーマは「低次の〔複合体〕において事態Bの成立条件（の一つ）がそなわっている」となる（以下の図3では「スキーマ1」）。また、用法1～用法3の共通点を表わすものとして「（低次のまたは高次の）〔複合体〕において事態Bの成立条件（の一つ）がそなわっている」というスキーマが抽出される（図3では「スキーマ2」）。実線の矢印はスキーマ関係を意味し、点線の矢印は拡張関係を意味している。

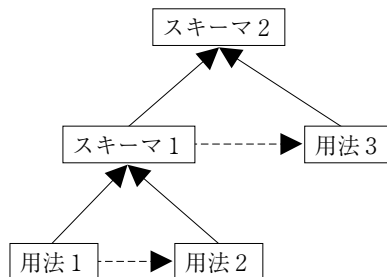


図3

「そうだ」はある事態Aが別の「事態Bを成立させる条件（の一つ）」として

とらえられた結果を表わすが、どの「成立条件」も「そうだ」によって表わせるわけではない。本稿で言う「成立条件」は、あくまでも本稿で記述したような「複合体」を背景にして成り立つものであり、「複合体」なしでは語れない。

### 3. 5 用法4:「やわらげ」

断定的判断を伝えることが話者の意図であるにもかかわらず、「そうだ」が使われることがある。

17. それも今までにこやかそうな顔がもつとにこやかになっていて・・・。

(isweb2.infoseek.co.jp/~shin27/a/log-ocha/1999/1999-12011231.html)

18. (「羅布麻茶」というお茶について) 名前がややこしそうだから、確かに構えてしまうかもしれないですね～。

(www.e-kusuri.net/contents/tea\_1.cfm?type=tea\_1&locate=ue)

19. 髪の毛はさささで長く、ぼろの服を着ています。とてもみすばらしいそうな男です。

(www.ii-okinawa.ne.jp/people/oshiro-5/dome/kakasi.html)

上記の例文では、話者は「にこやか」や「みすばらしい」と断定していると考えられる。そこで「そうだ」の意味はこれまでに上げたいずれの意味でもなく、判断の「やわらげ」である（詳しくはKekidze (2002年度) 及びKekidze (2003) を参照）。

用法1～用法3の違いは、「複合体」をめぐる違いである。一方、用法4はそれとは次元が違う。つまり、これは「複合体」にかかわる違いに基づいて派生した用法ではなく、断定的な表現のかわりに、話者が「そうだ」を用いるようになった結果できた用法である。そこで、用法4を、用法1～用法3の共通点を表わすスキーマ（「(低次のまたは高次の) [複合体] において事態Bの成立条件 (の一つ) がそなわっている」）からの拡張として考えることができる。また、「やわらげ」のようなかけ離れた拡張的用法までも統括するようなスーパースキーマは形成されているとは思われない。

### 3. 6 「そうだ」に関する本稿の立場の説明

ここでは、先行研究との違いを通じて、本稿の立場を説明する。

#### 3. 6. 1 寺村 (1984) など。

「そうだ」に関する先行研究のほとんど（森田 (1980)、寺村 (1984)、中島 (1991)、菊地 (2000 a) など）では、認知プロセスの対象である「現実」そのものと表現の意味が等しいものとして扱われている。以下、そのような研究の

代表として寺村（1984）による「そうだ」の記述を取り上げる。

ある対象が、近くある動的事象が起こることを予想させるような様相を呈していること、あるいはある性質、内情が表面に現れていることをいう表現である（p.239）。

「近くある動的事象が起こることを予想させるような様相を呈している」で説明できるのは、概念化される以前の「現実」ではなく、「そうだ」と結び付いているある特定のとらえ方で「現実」をとらえた結果の概念である。概念化される以前の「現実」は「雨が降る」などという概念（事態の概念）と何の関係もない。なぜならば、概念化されていない以上、「現実」はどのような性質も与えられておらず、何らかの概念と結び付けようがないからである。

それでは、実際の使用場面を考えたときに、話者は、知覚した現実をどのような「動的事象」とどのような結び付け方で結び付けるのか、という問題が出てくる。話者は様々なとらえ方で現実をとらえ、そのとらえ方によってある事態を別の事態とあるやり方で結び付ける。その結び付きは背景知識として話者が持っていると考えられる。しかし、寺村の記述では、そのような背景知識が明らかにされていないと考えられる。

森田（1980）、中畠（1991）、菊地（2000 a）では、表現の仕方は違うものの、上記の分析のすべては認知プロセスの対象である「現実」と表現の意味とを等しいものとして扱っている。「現実」と表現の意味が区別されない背景には、世界と言語が直接対応しているという前提があると考えられる。

世界と言語が直接的に対応しているという考え方は、伝統的な言語観として現在まで続いている。以下、その代表として、ポール・ロワイヤルの『論理学』とソシュールの言語理論を、佐藤（1996=1986）に基づいて見てみよう。

佐藤によれば、まず、ポール・ロワイヤル『論理学』では、「世界」に内在している天然の分節構造が忠実に「観念」の分節構造に反映し、その個々の「観念」に恣意的に「名辞」（名前）が当てられると考えられている（p.132）。つまり、我々は〈猫〉を「猫」、〈鼠〉を「鼠」と呼び分けているが、これは、言語以前に世界はすでに「自律的に」分節構造を持っているからである。我々は、その目盛りの一つ一つに「猫」や「鼠」というような名札を正しく貼り付けるだけでいいという考え方である。

次に、佐藤はソシュールの考え方を次のように批判している。ここでは、ポール・ロワイヤルの〈名辞〉に該当する〈シニフィアン〉と〈観念=意味〉に該当する〈シニフィエ〉とは、相互に「依存」しつつ「不分離」なまま自律的に言語記号の分節構造を編み出し、現実〈世界〉からの支配を受けるどころか逆にみずからの分節をもって〈世界〉を切り分ける、という仕組みになって

いる。例えば、我々は〈愛〉を「愛」、〈憎しみ〉を「憎しみ」と呼び分けているが、それと呼び分けるための基盤は外の現実世界とはまったく無関係に言語体系そのものの中にある (p.132)。

分節的なのは言語であると主張するソシュールの理論は、分節的なのは世界であると主張するポール・ロワイヤルの『論理学』の考え方の裏返しにすぎないと、佐藤は指摘している。なぜならば、何の分節も持っていない世界を恣意的な分節構造によって切り分けてしまう背景には、ポール・ロワイヤルが考えているような世界の分節への期待があるはずだと考えざるをえないからである。そして、一見正反対のように見えるこの二つの理論に共通するものとして、佐藤は「対応説」という考え方を指摘している。「対応説」とは、「世界と言語は何らかの形で対応しているという考え方」である。

しかし、実際には言語と世界が対応しているのは、話者のとらえ方の中においてのみである、というのが佐藤の主張である。もちろん、話者の概念化以前にも世界に何らかの「斑」(不均質性)があり、話者の行う概念化は世界と無関係というわけではない。しかし、実際に概念化するのはあくまでも話者である。したがって、話者を介さずに世界と言語を直接的に対応させるのは妥当ではない、というのが佐藤の批判である。佐藤 (1996=1986) よりもう少し後になるが、Lakoff (1987) や Langacker (1987) なども話者なくしては人間の言語を語れないことを主張している。

ここで、寺村などの記述をもう一度見てみよう。上で述べた通り、寺村などは、すでに出来上がった表現の中に現れる「現実」のみを扱っており、「現実」を前にした使用場面を考慮に入れていない。これは、上に述べた二つの理論のうち、ソシュール的な考え方であると思われる。ソシュール的な考え方では、「現実」は一切何の「分節」も持たない。記号体系の中でのみ我々は連続的である「現実」を恣意的に切り分けている、ということになる。確かに、このような立場に立てば、言語表現の意味を記述するにあたって、その言語表現が用いられる実際の使用場面としての「現実」には触れる必要がないことになる。

すでに出来上がった表現は、ある慣習化されたとらえ方でとらえた「現実」の概念を表わすものである。目の前の「現実」をこの慣習的なとらえ方で話者がとらえる場合に限り、その表現が用いられることになる。したがって、目の前の「現実」と言語表現の意味とを話者はいかにして結び付けているのかを明らかにする必要がある。本稿の〔複合体〕はそのような、「そうだ」の背景にある事態の結び付け方を明らかにする試みであった。

### 3. 6. 2 木下 (2001)

ここでは、木下 (2001) と本稿の立場の違いを説明する。木下 (2001) の仮説の問題点として、「そうだ」の表わす判断と「だ／である」で表わされる断定的な判断との違いが説明できないという点を、すでに2. 2で指摘した。ここでは、その問題が何に由来するかについて考え、本稿の立場を説明する。

木下 (2001) の仮説から「そうだ」と「だ」「である」のような断定的な判断との違いが導かれないのは、Bの成立に関する不確定要素が盛り込まれていないからだと考えられる。そして、この不確定要素の必要性が認められていないのは、二つの事態が隣接しているという「知識」に基づけば「そうだ」が表わす判断が自動的に出力され、他の判断は排除されるという考え方がこの分析の前提にあるからであろう。これは、現実のとらえ方によるAとBの関係の多様性を排除して最も抽象的な論理的関係だけで言語表現の意味が尽きるという考え方である（具体的に言えば、「そうだ」の意味は非常に抽象的な「隣接関係」で尽きるという考え方である）。したがって、この分析は、実は話者を排除していることになる。この点から見て、この言語観は、Lakoff (1987) などが「客観主義」として批判している言語観であると言わざるを得ない。

客観主義的な言語観の代表として、先に見たポール・ロワイヤルの『論理学』をここでもう一度見てみよう。ポール・ロワイヤルの『論理学』では、「世界」に内在する天然の分節構造が「観念」の分節構造に忠実に反映され、そのようにして分節された個々の「観念」に「名辞」（名前）が恣意的に当てられると考えられている（p.132）。木下 (2001) の仮説は、暗黙のうちにこれとまったく同じ言語観に基づいていると思われる。なぜならば、言語表現は現実世界をストレートに反映しているというポール・ロワイヤル的な発想を前提にしなければ、言語表現の意味を事態についての「知識」だけで説明しようとはしないはずだからである。

客観主義とは、言語表現を、話者を介さずに客観的な世界を反映しているものとする言語観である。客観主義は、言語の意味を現実世界の直接的反映と見なし、人間の主観の意味への介在を排除することで、学問としての厳密さを得ようとしている。確かに、厳密さはできる限り求めるべきものである。しかし、人間の主観的解釈を排除しては人間の言語は語れない。すでに見た通り、客観的にはまったく同じ場面で同じ知識に基づいて、断定的な表現で判断を表わすこともできるし、非断定的な表現にとどめることもできる。したがって、客観的な状況を記述したところで、ある言語表現に特有の特徴が明らかにされたことにはならない。そこで本稿では、事態Aと事態Bとを「客観的」にではなく、あくまでも話者の主観的判断に基づいて、そして「一般的」にではなく、



あくまでも「そうだ」と結びついたとらえ方でとらえるときのAとBの結びつきを記述した。

#### 4. おわりに

本稿では、「そうだ」の意味について仮説を立て、本稿と先行研究との仮説の違いが人間の言語をどう見るかという根本的な立場の違いによるものであることを示した。

このことは、推量を表わす形式「ようだ」についても言える。「ようだ」に関する先行研究としては、寺村（1984）、菊地（2000b）などがある。しかし、これらの研究のほとんどは、上で批判したように、問題の形式の背後にある概念操作に触れることなく「ようだ」の意味を記述している。一方、木下（1998）は、本稿で批判した木下（2001）と同じ問題点を含んでいる。したがって、言語を人間の思考の反映としてとらえる立場から「ようだ」を分析する余地はまだ残されている。

#### 注

- 1) 本稿はKekidze（2002年度）を修正したものである。
- 2) ある料理を食べてみてから、食べていない人に向かって「おいしそうでしょ!」とすることができる。しかし、この場合でも判断は食べていない人の立場から下されているから、「おいしい」は未確認の情報として扱われている。
- 3) 本稿で言う「プロセス」は、Langackerの言う“process”であり、次のように定義されている。“A relation having a positive temporal profile: its evolution through conceived time is portrayed via sequential scanning.” (Langacker 1987, p.491)。
- 4) 本稿で言う「成立条件」は、論理学における「必要条件」と「十分条件」とは異なる。あくまでも話者がある事態Aを、別の事態Bを成立させる条件ととらえているという意味においての成立条件である。
- 5) 次の例文なら、「赤そうだ」という判断が可能である。  
(モモ狩りのとき) 一見赤そうでも、もいでみるとまだまだだったりする。  
([rice.sawaya.ecei.tohoku.ac.jp/~yamas/yamanashi/2ndday.html](http://rice.sawaya.ecei.tohoku.ac.jp/~yamas/yamanashi/2ndday.html))



この場合、「赤そうだ」という文が自然であるのは、この「赤い」は「モモ」の「色」ではなく、「熟している」という意味を表わすからである。つまり、「モモ」が「熟している」かどうかについては外見だけでは必ずしも判断できない。したがって、これは対象の「内的特徴」である。

- 6) ここで言う「拡張」というのは、「人間のカテゴリー認識において見られる能力の一つ。カテゴリーの基本となる成員とかなりの類似点を持つてはいるものの、相違点もみられる事例に対して、その相違点を捨象してそれを包括するような形でカテゴリーを広げてゆくこと」である（河上1996、p.203）。
- 7) スキーマとは、「本来異なる構造の違いを大まかな見方を取ることで抽象することによって生じる共通性のことである」。(Langacker 2000, p.65)。

## 参考文献

- 河上誓作 編著 (1996) 『認知言語学の基礎』 研究社
- 菊地康人 (2000 a) 「いわゆる様態の『そうだ』の基本的意味—あわせて、その否定各形の意味の差について—」『日本語教育』107号、pp.16-25、日本語教育学会
- 菊地康人 (2000 b) 「『ようだ』と『らしい』—『そうだ』『だろう』との比較を含めて—」『国語学』第51巻1号、pp.46-60、国語学会
- 木下りか (1998) 「ヨウダ・ラシイー真偽判断のモダリティの体系における『推論』」『日本語教育』96号、pp.154-166、日本語教育学会
- 木下りか (2001) 「事態の隣接関係と様態のソウダ」『日本語文法』1巻1号、pp.137-158、日本語文法学会、くろしお出版
- ケキゼ・タチアナ (2000) 「『(～) そうだ』の意味分析」『日本語教育』107号、pp.7-15、日本語教育学会
- Kekidze Tatiana (2002年度) 「現代日本語の非断定的表現～『そうだ』、『げ』、『っぽい』を中心に～」博士(文学)学位論文、名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻
- Kekidze Tatiana (2003) 「現代日本語における表現の『やわらげ』～『そうだ』、『げ』、『っぽい』などの場合～」『言葉と文化』第4号、pp.293-306、名古屋大学国際言語文化研究科日本言語文化専攻
- 佐藤信夫 (1986) 『意味の弾性--- レトリックの意味論へ---』 岩波書店 (=1996 『レトリックの意味論』 講談社学術文庫)

寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』、くろしお出版

丸山圭三郎 (1981) 『ソシユールの思想』 岩波書店

森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』 角川書店

Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous things*. Chicago: The University of Chicago Press. (池上嘉彦・河上誓作ほか訳 1993 『認知意味論』 大修館書店)

Langacker, R.W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar* Vol.1. Stanford: Stanford University Press.

Langacker, R.W. (2000) 「動的使用依拠モデル」(坪井栄治郎(訳)) in 坂原茂(編) 『認知言語学の発展: Advances in Cognitive Linguistics』 pp.61-143, ひつじ書房

Соссюр Ф., де (1916) «Курс общей лингвистики» / Пер. с фр. А.М. Сухотина; Москва : Издательство «Логос», 1999

**言葉と文化**  
**Issues in Language and Culture**

**第 5 号**

2 0 0 4 年 3 月 3 1 日 発行

編集・発行 名古屋大学大学院  
国際言語文化研究科  
日本言語文化専攻

印刷 名古屋大学  
消費生活協同組合 印刷部